

C-10 急性期 NPPV におけるマスクフィッティングの工夫

医療法人かりゆし会 ハートライフ病院 看護部
喜瀬一也

〔目的〕 当院において急性期に対する NPPV の導入は、平成 13 年度よりレスピロニクス社製のマスクインターフェイスの導入とともに主に COPD の急性増悪による CO2 ナルコーシスに対して行われるようになった。

しかし、マスクフィッティングがうまくいかずリークの補正ができず導入を中止したり、鼻の潰瘍形成や皮膚のトラブルが多く見受けられた。原因はリークを意識するあまり、強くヘッドギアを締め付けること、マスクサイズの不一致、マスクの圧迫感により患者の協力が得られない等であった。そこで、平成 14 年 4 月 1 日よりマスク装着時の方法を統一し、さらにマスクの選択、ヘッドギアの改良にて皮膚のトラブルが軽減でき、またリーク補正内でのフィッティングができたので報告する。

〔対象〕

平成 13 年 4 月 1 日～平成 15 年 3 月 1 日までの 33 症例

〔方法〕

- 1 マスクフィッティングのマニュアルを作成し方法を統一化した。
- 2 スペクトラムフルフェイスマスクでフィットしない症例にトータルフェイス、イメージ 3 を使用し最適なマスクを選択した。
- 3 当院で使用している 3 種類のマスクのなかでフィット感のよいイメージ 3 マスクが使用しやすいようにヘッドギアを改良した。

〔結果〕

平成 13 年 4 月 1 日～平成 14 年 3 月 31 日の間に NPPV を導入した 10 例では鼻や額の潰瘍形成が多く見られたのに対しマスクフィッティング方法を統一した後に潰瘍形成をおこしたのは 23 例中 1 例で、また顔面の擦過傷も 0 例、

ドライアイも 5 例から 1 例へ軽減した。また、マスクフィッティングの工夫により患者の拒否が少なくなった。

〔結語〕

1 NPPV の導入においてマスクフィッティングは非常に重要であるが、まず装着方法を統一しマスクの種類を増やしたことで、マスクリークの値をその器械の補償するギリギリの値で許容させたことで過度の圧迫がなくなり、合併症である皮膚のトラブルを軽減できた。

〔考察〕

これまで NPPV の導入でマスクフィッティングはリークを無くすことが治療効果を左右するもので、潰瘍形成など皮膚のトラブルは仕方のないものと考えられ、顔面にマスクを強く押し当て鼻梁部に潰瘍を形成するなど皮膚のトラブルが多く見受けられた、また対症療法的に顔面に保護材を貼ったりスキนครリームを塗布するなどの方法が広く行われているが必ずしも皮膚のトラブルを予防できているわけではない。

今回我々は、マスク換気である NPPV はリークするものと理解し、リーク補償値の範囲内でフィッティングさせたところ、ほぼ全症例に保護材やスキนครリームは使用することなく潰瘍形成などの皮膚トラブルの軽減に成功した。また患者の苦痛も軽減され受け入れも良くなった。既製のマスクではフィッティングが難しかった症例には改良したヘッドギアを使用したマスクで対応している。

マスクフィッティングの改良は、血液ガスの結果などから許容範囲内でのリークで治療効果に影響はなく潰瘍形成の軽減、患者の受け入れの向上につながっていると考える。